

Aileen Ward :

*John Keats : The
Making of a Poet*

宮 下 忠 二

Keats の伝記を書くことは容易なわざではない。彼の詩に関する批評や研究書は、毎年 1, 2 冊は出版されて、いずれも新らしい評価や解釈を提供しているので、その方面のすぐれた書物を 10 冊位数えることはたやすい。しかし、伝記ということになると、今日までわれわれが信頼していた標準的伝記は、四半世紀も前に書かれた Dorothy Hewlett: *A Life of John Keats* (1938; 2nd ed. rev., 1950) であった。Robert Gittings 氏のような篤学の研究者が、*John Keats: the Living Year* (1954) その他の、新らしい資料による興味津々たる伝記的研究を発表してはいるが、これらは Keats の生涯の一部を扱ったものであって、詩人の全体像を描くに至っていない。

Keats の伝記を書く上での困難な点はいろいろある。まず、資料がイギリスとアメリカとに分散している。今日では、Keats 自筆の原稿や手紙、あるいは彼の家族や友人たちの手稿は、9 割までハーヴァード大学の the Houghton Library にあるといわれる。しかし一方、Keats の詩想を生み出した Hampstead や Wentworth Place その他の旧跡は、彼が客死したローマの遺跡と共に、イギリス

本国とイタリアの風土の中に厳存していて、いかにアメリカの富をもってしても、これを移転するわけにはいかないのである。また Keats の友人たちが、つまらぬ競争意識のために、同時代人から見た人間 Keats の像を残してくれなかったことも残念なことで、このことが今日に至るまで、正しい Keats 像の把握に、どれほど障害になっているか知れないのである。Richard Monckton Milnes が最初の Keats 伝、*Life, Letters, and Literary Remains of John Keats* を出版したのは、詩人の死後 27 年をへた 1848 年であった。そしてそれ以後、今世紀に至るまで、ヴィクトリア朝的な感傷にみちた讃仰が若くして逝ったこの天才詩人を取り巻き、Keats の本当の姿を端的に見つめようとする伝記家は、なかなか現われなかったのである。

もひとつの、そして最大の、真の Keats 像構築の難しさは、この詩人自身が、詩や手紙の中で、独自の詩観その他の感想は実に雄弁に語っているにもかかわらず、こと私事に関しては頑強に口をつぐんでいる点である。生家の事情、数年にわたる医学修業時代の生活と勉学、とくに彼の詩的想像の世界を解明する決定的な鍵である女性関係について、あの厩大な量に上る手紙の中でも、殆ど口をすべらさないのである。

われわれは、過去のそれぞれの時期に、一応の役割を果たした Keats 伝として、Sir Sidney Colvin の著作 (1917)、アメリカの女流詩人 Amy Lowell のもの (1925)、および前述の Hewlett 女史の伝 (1938) を持っている。Colvin と Lowell の伝記は、一言でいえば、イギリスの伝記文学の伝統的手法である life and letters 叙述の形式によるもので、資料を駆使して、生活と作品との相互の照応を記述する、いわゆる評伝である。この二つの伝記は、それぞれすぐれた点を持つ力作であるが、Colvin ののは正確公正だが資

料が足らず、Lowell のは資料の豊富さに圧倒されてしばしば冗漫であり、見当違いを犯して、今日から見ると、双方とも人間像の究明も詩の解明も充分でないうらみがある。詩人の生活を作品から切り離して追求しようとしたのは、Hewlett が最初である。女史は詩の解釈に力点を置かず、重要な資料を冷静に処理して、Keats の歩んだ日々生活を忠実に再現しようとした。詩の評価には食い足りないものがあるが、その、感傷を排し、事実のみを注視する実証的態度によって、人間 Keats の姿に、従来よりも数歩近接しえたことは間違いない。四半世紀の間、標準的 Keats 伝として迎えられたのは当然であった。

だが、Hewlett 女史も、Keats の沈黙の背後にある心の奥底に立入ることはできなかった。Gittings 氏が、新しい資料を掘り起こして、詩人の人生の要点を適確に捉え、生活と詩との関係に新しい角度から照明を与えた頃から、Keats の伝記研究は、その心の内部に向かってさらに前進を示した。(氏はつい最近も、*The Keats Inheritance* [1964] を出して、詩人の母方の祖父らの遺言書を整理し、Keats の生活をめぐる経済問題に新しい解明の手がかりを与えている。) そしてまた一方では、前大戦中から戦後にかけて、ハーヴァードの故 Hyder E. Rollins 氏は、詩人の周囲の人々の手紙を集めた *The Keats Circle* (1948. rev. ed. 1964) や、完璧に近い Keats 書簡集 *The Letters of John Keats* (1958) などの労作を公刊した。こうして本格的な Keats 伝の書かれる時は、いよいよ熟してきたのであった。

こういう時に現われたのが、Ward 女史の新 Keats 伝である。そしてこの労作はわれわれの期待を裏切らなかった。女史は、これまでに公刊された資料を見事に処理しているだけでなく、新しい資料を加え、前述の、

Keats 伝を書く上での難点を、すべて克服している。女史はかつてハーヴァードのとなり Radcliffe College で教え、現在は Sarah Lawrence College の教授であるが、資料を渉獵するのみならず、イギリスやイタリアにも滞在して、Keats の生活を追体験することに没頭した様である。また女史がアメリカ生まれの、しかも比較的若い学者であることが、ヴィクトリア朝的な感傷からの断絶を容易ならしめたと思われる。だがこの新 Keats 伝が、従来の伝記に比べてひとときわ傑出している点は、詩人の詩と手紙の行間を読み取り、その心理を深く洞察し、その上に立って詩心の成育を熱心に見つめ記録している一人称小説のような叙述である。女史は詩人 Keats よりも人間 Keats を、つまり詩人の「創造的生活の内面の劇」(the inner drama of his creative life as it is recorded in his poems and letters)を描こうとした、と「はしがき」に述べているが、その意図は見事に成し遂げられているといつてよい。

Ward は、Keats の詩心が形成されてゆく上に、彼の身心に作用したあらゆる要因を周到に点検して手ぎわよく描出している。たとえば、Keats の幼年時代を描くのに、一方において背景を重視し、当時の英仏戦争のさなか、ナポレオンの襲撃を恐れるロンドン市民の緊張に注意するかと思うと、他方、彼の幼年時代における、父の落馬による死後の、母の性急な再婚という事件が、詩人の潜在意識に大きな痕跡を残したことを強調する。この、女性の裏切りという、ハムレットの不安が、Keats の生涯に決定的な影響を及ぼし、たとえばそれは *Lamia* に至るまでの詩作に随所に現われ、あるいは Fanny Brawne との恋愛についても大きな障害となった、というのである。

ことに潜在意識の把握は、大胆であり興味をそそると同時に正確といわなければなら

ぬ。Freud の深層心理学に学んでいることは明白だが、その応用は巧みであり説得力をもっている。Keats は Fanny Brawne と知り合い、しばしば会うようになってからも、アメリカにいる弟 George 夫妻への手紙の中に彼女のことをあまり書いていない。すると Ward 女史は、かえってその沈黙の中に、詩人の Fanny への愛情の深まりを見抜くのである(p. 238)。

そういう、詩人の心理への深い理解は、詩に関しても、一見奇抜なようにいて実はかなり正確な解釈を生んでいる。たとえば、初期の作品には、“I stood tip-toe upon a little hill” だとか、*On First Looking into Chapman's Homer* 中の Cortez が Darien の頂上から太平洋を見るイメージとか、あるいは *Endymion* 第一巻の冒頭の Latmos 山頂の Endymion の姿だとか、こういうところにうかがわれる upward aspiration は、Keats の背が低かったことに対する無意識の compensation だ、という指摘は面白い(p. 100)し、また同じく *Chapman Sonnet* その他に用いられている、詩作を航海にたとえるイメージは、船乗りだった叔父への英雄崇拜から生まれたのだ、という解釈も、作品を詩人の生活から切り離す批評では思いつかぬ洞察である。

著者は、Keats の生活上の事実と詩の制作とが、不可分に結びついていると主張しているのではなく、むしろ “Keats' greatness as a man is something distinct from, yet at the same time significantly related to his greatness as a poet” (Preface) という観点に立っているのだが、以上のような、あくまでも詩人の生活に即した考察が、結果としては、詩作に関しても、多くのすぐれた解釈や批評を生んでいる。それは数多くのソネットから、オード、物語詩などの殆どすべてに及んでいるのだが、ここではそれが見事

に成功した例として、*Endymion* 解釈をあげてみよう。この、ギリシア神話に題材を取った4巻約4000行の大作は、従来もいくつかの批評や研究があったにもかかわらず、説得力のある解釈をもたなかった作品である。多くの研究は羊飼の若者 *Endymion* と月の女神との恋に、何か寓意ないし象徴を探索した。Ward 女史は、この詩をアレゴリとして解釈することを拒否し、これが何よりもまず、21歳の青年の作品らしく、官能的な恋愛詩なのだ (the poem is about sensual love, like most poems by men of twenty-one.) と断定し、Keats はこの詩を書きながらも、先輩批評家 Leigh Hunt からの精神的な独立や、Shakespeare の作品の耽読、などという日毎の体験によって、人格の変貌を遂げていったのであって、それ故この詩は、詩人の精神の形成過程を示すものとしても重要な作品だと述べている。筆者自身も同様な解釈を試みたことがあるからいうのではないが (『一橋大学人文科学研究』1, 「エンディミオン試論」参照), *Endymion* 解釈の落ち着くところは、結局はこのあたりであろう。

この新 Keats 伝には、その他いくつかの特色がある。Keats の医学修業時代に関して、19世紀初頭のイギリスには、8,000人の外科医に対し、内科医は300人足らずで、イギリスの医学はこの時代に、急速に近代化してゆく途中にあったのだとか、その頃は肺病は4人のうち1人の生命を奪った、とかいった、小さい事実ながら Keats の生涯の理解に役立つ information は、枚挙にいとまがない。また通常の伝記が、出生の場所や日時や家族の系譜の記述で始まるのに対し、この伝記は、前にふれたように、1803—5年の英仏戦争による、当時のロンドン市民の緊張状態の叙述で、第一章の冒頭をはじめている。戦争の危機の中で幼年時代を過したことが、詩人の人生の門出にあたって、勇気の肝要なことを教

えたのだ、と Ward はいうのだが、そういう詩人の精神形成の場を、家庭やその周辺にとどめず、社会全体にあった雰囲気になで及ぼしているところに、女史の視野の広さがあると同時に、その背景把握の巧みさは、魅力ある話術を示していて、Keats の幼少時代がいかにもそうであったと、読者に納得させるのである。Keats の詩作生活を、大洋での探検航海にたとえ、第一章 Close to the Source, 第二章 The Widening Stream, 第三章 The Dark City, 第四章 The Green Shore, 第五章 A Leap into the Sea ……第十三章 A Wrecked Life, 第十四章 End of the Voyage, というふうにその生涯を区分しているのも、心憎いばかりの話術の巧みさを語っているといえる。

細かいことを言えば、この本にも欠点はある。*Endymion* 執筆当時、Oxford の友人を訪れた Keats が、そこで syphilis にかかったという説をむしかえしているが、この詩の内容やその頃の手紙には、そんな病気を全く知らぬ純真な青年が映っている。この辺に、Ward の、女性による男性観の限界があるのかもしれない。詩人の生活を、詩の世界から全く独立させて追求しているために、先人の詩の影響に殆どふれていない点も、物足りないと思う読者もあるであろう。たとえば *La Belle Dame sans Merci* には、Spenser の *Fairie Queene* など、数人の先人詩人の影響があることは明らかであるが、Ward はそれには殆ど注意せず、Keats がその詩を書く数日前に見た夢と、夭折した弟 Tom が、生前、偽りの手紙にだまされて架空の女性を恋したことを発見してのショックと怒りが、この詩の制作の動機だとして、そのいきさつを詳しく述べている (pp. 272—75)。Ward 女史の記述はそれなりに一貫して見事だけれども、作品を作者から切り離して論ずる批評の立場からは、このあたりが最も問題となる

ところであろう。

ともあれ、この新 Keats 伝が、従来の伝記に見られない、詩人の「内面の劇」の把握に成功していることは疑いない。Hewlett 以前の Keats 伝を、19 世紀の写実小説だとすれば、Ward の伝記は、たとえば D. H. Lawrence の小説を連想させる。

この新 Keats 伝と同じ年に、やや遅れて、ハーヴァードの W. J. Bate 教授が、730 頁の浩瀚な伝記 *John Keats* (Harvard U. P., 1963) を出版した。この著述について論じる余裕は今はない。ただ、この Keats 伝は、

前にちょっとふれた Colvin や Lowell の系列に属する life and letters 叙述形式のもので、詩形や思想の究明には、新らしく鋭い考察を示しているが、Keats の人間像の解明という点では、新味は少ないといえる。F. W. Bateson は近著、*A Guide to English Literature* (1965) の中で、この本を伝記ではなく一般研究書目の中に入れている。

Aileen Ward: *John Keats: The Making of a Poet*, Secker and Warburg, London, 1963.